



新局玉石童子訓

卷十



遠 18
1279
31



新編 玉童子 豐編

第四版自第四十六回至五十回全五卷
曲亭翁口授編一陽齋豐國画 文溪堂板

刊

新局玉石童子訓第四版附言
人生れて五七歳鳩車竹馬の始より年五五に至るまで遊戯娛樂の外嗜慾
賢と背く不肖とる二十の嗜慾
故事を思ふ黄帝の衛生と好堯舜の仁義を好桀紂の不仁を好
学と好宰予の晝寝と好莊周の寓言と好淮南王の豆腐と好蔡邕の
瘡痂と嘆ふと好杜預の左傳と好陶淵明の菊と好陶弘景の松風と好
好李白杜子美の詩と好羅貫中の俗語小説と好むが如し枚挙
是より下和漢の世俗其嗜慾甚るるに敗れと取らざるとの者其
酒と好飽とる命と破驕奢と好て禮を失貨財積て
福の家と破る者あり只の弊并のるに賤くて貴れと犯むと好む者
富の思て用られんと好む者の屢譏り或外物を飾ると好む者

和漢の世俗其嗜慾甚るるに敗れと取らざるとの者
酒と好 飽とる命と破 驕奢と好 禮を失 貨財積 福の家と破る者あり 只の弊并のるに 賤く 貴れと犯むと好む者 富の思て用られんと好む者の屢譏り 或外物を飾ると好む者

らざしく出さる者其財用足らざしく窮鬼の祟あり好ま思慮と兼其者其
ざしく命を縮め好ま戦ふ者疵と蒙り好ま遊者溺るあり或人の悪
この好ま或不学ゆ先達と識りて彼名を賣ま其好者小人の好む所
悪む所皆是好む所の甚し死に至りて破敗るるとるべし其故小大人君子
憎むを宜しとま入其好まを知る時下なる者是非由り其機を攪むとる慎
まのあまら況士庶人の貧賤多と嗜慾好憎の甚き利ありとるも終小害あり
世人の父母と者初其子小教ふる情と折れ慾と禁る第一義と做さ死而
譬言ハ予が如く素より美食と嗜ま美衣と好ま富貴と羨ま貧賤と侮
らむ好む所讀書筆研夜もて日小継ぐ者五六十年人の師とることを好む
故小情地小戲墨と事とて世の蒙昧と醒さま欲ま其著蘊とて大小百餘
種是が為小日夜眼氣と使ふ者五十餘年の久小至りく瞳子年々小衰耗と

子頁及と息及と同一く是は加ふる小痛癢飲身小通りて坐臥も亦安らは是より
来好む所と排斥く獨坐靜黙木偶小異る其好まの過る後悔何及ぶか
是將天平命を哉かの如く者四年一日書肆文溪堂詣る亦哄誘く前
集の果さる續せ刊刻せま欲ま亦此の技るてみづら老と養ふ
足らば且春日秋夕の長きを獨かも寝て果報と俟つもあら秘を屢婦幼小
字を教え代書と課せ稿と起ま婦幼小文字小疎け其一句一行毎小教授
可寧反復まれも動まは少僻め思ひ違く左右小甚し死誤字あとも五
佳字たも見ることゆぎ只讀せとる小傍訓との讀故小其詭譎と知る小
より知又淨書筆研の多小謬らるも其小校訂も亦婦幼小任せて書肆の
責を塞ふ者玉石童子訓即是の古より和漢の文人不幸小失明の後著
述ある者ゆら然ると五舌の強とるれ止るとを知らまとを識るもあら笑あるべ

又同好の諸君子... 又同好の諸君子予が其の苦樂と憐れむありの如く奇として愛するも... 誤

第一版卷の上四行大皇子... 第一版卷の上四行大皇子... 誤写の同巻貌

同卷九の易違... 同卷九の易違... 誤写の同巻貌

第二版卷の二下... 第二版卷の二下... 誤写の同巻貌

卷の五上... 卷の五上... 誤写の同巻貌

卷の五下... 卷の五下... 誤写の同巻貌

第二版卷六の十二... 第二版卷六の十二... 誤写の同巻貌

卷の十... 丁左八... 約... 東... 卷の十... 丁右度帳... 誤写の當... 小度牒... 作るべ

○卷の十二... 我遠曾... 同巻八... 活却... 卷の十二... 誤写の當

客扱ひ... 同巻九... 真術... 同巻七... 小謡亭... 誤写の當

○卷の十四... 僅方... 同巻八... 女子... 卷の十五... 誤写の當

八の吹... 同巻六... 睡毗... 同巻三... 扇... 同巻... 誤写の當

十一行... 同巻十... 聽ね... 誤写の當

是他精細家の活眼... 同巻十... 誤写の當

二校三校... 同巻十... 誤写の當

本の誤写の儘... 同巻十... 誤写の當

風葉塵埃のあり... 同巻十... 誤写の當

弘化二年己巳歲梢念五... 四谷隱士識





臺床唐二たのこ

松ひらあひまの
 不運にねせまかた
 録昔本定井集中之句
 四
 三

奴隸小雪太
こせうた

三ノ首三ノ言卷一ノ
 一ノ首三ノ言卷一ノ



窓井の方まどい

婦言勿聽
 為恐彼牝
 鷄之晨也
性
齋

曾根見伍六郎
健宗

三ノ首三ノ言卷一ノ
 一ノ首三ノ言卷一ノ



相撲とり並ぶや
 秋のからゆ
 録玄峯集申之句 幽亭
 韓錦擬三郎
 からぬらぬ

奈良櫻八重作



孝順反哺
 鳥貞操雪中
 松

防守筑四郎

季彦

孝女授手

三宅

六



世の中をたぐり
 毛虫のなぐもかか
 本編作者自題

四頁

部領大刀自

にらり
 おりとりの

鏑野郡司範的
 のかぢらのま

六上

八上



勇婦押繪
 おまゝ

顔色雖不似
 孟光之黒
 勇敢久擇對
 維女大夫

福
 統

白日鷲
 とる

十六郎
 らう

五石童子言卷十六

文治元年

新局玉石童子訓第四版自第四十六回至五十回總目錄

○卷之十六

第四十六回

好純撈實暴巨謀狂態

主僕改貌旅宿中初髻

○卷之十七

第四十七回

七鹿山厄四少年異禍福

千仞谷中神靈出現新奇

○卷之十八

第四十八回

率偽兵健宗襲好純

驚醉夢良臣辨玉石

○卷之十九

第四十九回

野上驛惡僕賺惡主

立合阪仁人憐孝女

○卷之二十

第五十回

一金一藥盲龜遇浮木

押繪告禍行成勝通能

新局玉石童子訓卷之十六

東都 曲亭主人口授編次

第四十六回

好純実を撈る暴巨謀の狂態
主僕貌を改る旅宿中の初髻

再説大江杜四郎成勝。峯張深六郎通能。病厄稍瘳りて。他郷へ去ま。欲
する小主人石見。好純が猶。胎まのり。あれ。先試歩の爲。ふと。主僕割
籠。餉を腰。ふく。早。早。り。近郊。小道。逢。た。あ。の。日。の。拘。杞。村。福。富。の。方。へ。と。て
ゆ。程。小。折。り。二。月。の。初。旬。あ。て。目。小。美。一。花。梅。の。花。單。葉。ハ。散。て。千。葉。も。猶
香。ふ。と。馨。路。傍。の。樹。芽。若。草。春。め。た。て。右。左。自。叢。麥。の。圃。より。升。る。翔
鶴。數。鶯。も。外。あ。る。ぬ。調。子。ハ。高。谷。里。神。樂。今。日。一。日。初。午。あ。り。し。れ。ば。箱。荷
祭祀。も。天。離。る。鄙。あ。あ。れ。が。千。仞。劍。神。を。齋。忌。の。注。連。懺。其。村。毎。小。販。した。

人の往還も常小倍を里の総角より群て飽ぬ大鼓の音さふ初雷欬と
 りぬ。杜四郎と茶六も東より西より思ひの隨ふ見盡くと長は春の日故
 く時候枸杞村までかき來り來り程不後れりける。茶六杜四郎を喚りて
 和子一霎時止りて已脱落しるをそれ方僅想ひ後村の彼茶店小
 菅笠と割籠さ措遺れぬ走りかきて拿もて來てん。暫小里入り
 あり。這頭より觀音寺の城へ捷徑ありと云り。开を又入りて問を徐ふ
 あり。と云を杜四郎らちめて笠のさかき棄るとも惜も足らぬの
 今朝主人の取も借されるを争何せん戻りて拿るもよか
 らん。梨を貽して其方へいん疾々せんとしそがを茶六は
 むく逐就たすらん。と云り。故來り路暮地を走りて見え
 るのふけり。今程ふ杜四郎成勝へ彼捷徑を問ふと云り。四下を見

くふ。這頭へ一條の驛路ゆ左右に最なる枸杞の弥生小生
 へん茶店あり。前向より來り人小逢ね思難く猶や程小と見
 箇の田婦あり。年齢三十許ゆあり眼圓小唇厚く身材高く肥
 脂とて酒肥満といふ者小似たり。身中袴の廣袖衣二より被て
 裾折り白二布の端を顯したるが。這頭の枸杞を菱採りて薪小
 せありむごん彼身小坐を占て連り小鎌を研てを。當下杜四郎
 件の田婦を呼りて平介あり言問ん。這里より觀音寺の城へ
 徑のありあはるを。そを知りてか。と云を田婦見りて。噫
 ぬ其聲音も猜さる。他御の人をあらんごん。乍麼那里より來
 たる。觀音寺の城内小相識や。と問復されて然と云。我ハ
 客も大江杜四郎成勝と喚り者。近曾遊歴して這地小あり。觀音寺の

城内あり。高嶋生由縁われ去歳の秋より那里に在り。今日、這頭、小遊
 び過して既、小日影の殺死されば、あつろ、只管、いそがれて、捷徑、あつろ、むき、欲を
 りの、詳、小教、元よかと、説、れて、田婦、含笑、て、原來、要、ある、祿、刀、あつろ、小疑、ふて
 何を、飲、秘、さん、問、せ、り、の、捷、徑、の、猶、真、直、小、二、町、を、り、行、せ、り、右、の、方、最
 老、う、櫛、樹、あり、其、里、より、路、を、右、取、り、て、十、町、有、餘、ゆ、せ、り、左、右、へ
 別、る、徑、路、あり、其、里、より、路、を、左、り、取、り、て、ゆ、と、又、十、町、を、り、み、て
 彼、城、下、小、届、り、あ、ん、左、右、を、み、違、へ、の、ひ、と、指、さ、し、示、し、と、誨、れ、杜、四、郎
 飲、ひ、て、开、き、さ、ら、る、ゆ、り、あ、ん、小、汝、小、猶、頼、む、べ、ら、り、あり、我、と、路、の、一、少、半、
 後、れ、て、遠、里、へ、來、ぬ、あ、ん、其、面、影、の、箇、様、々、々、打、扮、し、如、此、之、其、少、半、の、過、を
 見、ば、汝、益、々、呼、留、り、て、又、捷、徑、を、教、示、し、我、為、小、言、傳、や、一、樹、の、蔭、も、他
 生、の、縁、ゆ、と、と、諄、々、と、を、田、婦、は、ん、點、頭、て、其、美、も、あ、ら、る、ゆ、り、疾、

あつせ、ひ、ね、と、応、て、又、鎌、を、研、て、を、り、是、小、より、杜、四、郎、へ、ゆ、と、二、町、あ、り、
 小、し、と、果、し、て、右、方、小、櫛、樹、あり、あ、ん、と、思、ひ、か、ば、鼻、紙、を、長、く、引、裂、
 て、其、下、枝、小、締、吊、て、も、て、柴、六、の、為、小、聚、ま、を、他、今、か、り、あ、ん、と、猶、立、在、
 工、半、响、許、候、ハ、又、生、憎、小、日、影、い、ち、敵、死、し、我、ま、ま、飲、か、て、在、る、べ、ら、
 程、遠、く、と、逐、着、ぬ、ん、と、思、捨、り、右、の、徑、路、を、ゆ、と、い、ま、三、町、小、過、だ、と、疏
 跟、來、り、伴、の、田、婦、利、鎌、を、袖、小、隠、し、持、て、竊、歩、さ、り、近、つ、死、て、聲、を、も、り、け、ぞ
 背、より、揮、晃、め、り、と、彼、鎌、を、杜、四、郎、の、肩、尖、へ、打、ち、け、て、曳、く、刃、の、光、小、杜、四、郎
 ハ、吐、嗟、と、そ、う、小、身、を、淪、し、る、修、鍊、の、刺、捷、二、び、打、入、む、鎌、の、柄、と、俱、小、利
 直、を、食、禁、て、耶、と、引、被、り、て、投、り、か、ば、田、婦、ハ、杜、四、郎、の、頭、顛、の、上、を、う、ら、越、て、
 筋、斗、の、り、三、三、間、前、向、へ、撞、と、倒、れ、け、る、當、下、杜、四、郎、成、勝、ハ、思、ひ、け、り、は、這、
 宛、家、を、見、れ、ば、是、別、人、あ、ら、る、と、嚮、小、捷、徑、を、誨、り、彼、田、婦、あ、り、け、れ、ば、且、諄、り、且

怒ふの境を罵責る聲も急迫這奴何苦の怨ありて我を粗撃ましくをも意
 らぬ前徑を事とせ賊婦ふあせありらめ疾首伏して縛縛の索を受ふと
 教團する其間小田婦ハ身を起し来て落き鎌を掻食りら身を捕へて疾視
 嗜る聲高々外聞互に鳥海をよひて左ても右ても活ていかぬ我冤家
 るま覚期の為小意衷を示さん死天三途の話柄小听ねが。我身ハ枸杞木
 名もあは葉木の巨椽鬼妻と喚做されて親族もろく子もあはる三三年前の
 比より墨鳥の盆九郎と狎深て連理の枕比翼鶯夜の衾ハ陝くとも廣た世界ハ
 二入とあは郎ハ無難や去歲の冬你が為小搦捕れて終ふ頭を刎られたり人
 傳小穿し其日より憤胸ハ盈ていふ怨を復えんと思ふふあはぬぞも冤
 家ハ只其名をのぞきていふ其面を認めざ況彼身ハ城内ハ在りうら又ハ道
 流れて敷きとたえて便なき小憂うりける日を過さし今料らざる捷徑を

向し你が聲音の浪華人ハ似たりて我亦思ふなりあれハ言を設て向
 試し小漫小名告你が命運既小盡ぬ時至りて我情人の讐敵も你面
 を認めしより怖るあつを推鎮めて這横路へ誑入れし其細頸を其代て葉
 亡人小多向んぞと思ふあつを知らばやとの名も果は杜四郎ハ呵々とうち
 笑ひて愚之巨椽とやん彼盆九郎ハ罪人ハ我家傳の刀子を竊合りた
 るのそあは人を害ま積悪も終小死刑小行れし小搦捕しを咎
 小し我を怨むる甚廢をも膽魂ハ女ハ似けり勇あは小似されども理
 美小間ハ四婦の本性情物ハ狂々後悔あはん早く惑ハを醒させやと諭
 小を穿る眼を睜りて开き昇怯命ハ惜は盆九罪のあはあれ彼人
 搦捕れし何ぞ小首を垂ふべし只我怨ハ你ハ在り似而非頑童奴覚期
 をせよと罵狂ハ匹婦の鏡勇五音の月と見光を利鎌を問うらち振り

撥んと我むを杜四郎の右小反一左小外一と両三番疲勞多利鎌を丁と打
落を巻の牙の雲間の電光額を撲地と打惱巨椽の吐嗟と瞑眩にて怯むを
はすくと両手を捉りて背へ楚と捺杖で登一蒐り三尺帯にて結扱て四下を見
かす小臂迫る老樹の杉小罹り一藤蔓のほれ右手を伸る曳をて罵
狂の葉木の巨椽を曳摺もて老樹の幹へ團々纏ゆぞあつりける。法の段の
前板幾四十五回の浩處小峯張米六郎通能の彼忘れさ菅笠と割
籠を肩小引かひて遠くかり来り杜四郎の遺一たる葉あき巴
惑ひもせどまありけり。と後影を遙不見り走着てやよ和子。目今か
へりゆたといひり又愕然と驚くる大さあつた。やよ和子御身の肩尖よ
り鮮血多く流れより。疵を負せのひり欬と問ふふりめて心つく杜四
郎もうち驚かして原來よの悪棍婦の鎌小鈍くも身を傷られ一欬現我

あつり由断の大敵其故の箇様々々と巨椽小捷徑を問ひ一始より彼
が狼籍の事の顛末已こをほむぞ拉込て那里の老樹小繫糸禁よる其
事の終まで詞急迫く解示せ米六のよ怒小堪を介らは是寛を
まじに彼奴も盗兒の支黨あるふあて所棄ぬる。と那頭劈記息
の緒断んと教圍猛く走蒐らまうをけるを杜四郎推禁りて開ら大
人氣あり敵も小足らぬ狂女を殺して何せん先我多疵小仙丹を塗て
宿所へいそぐべし。といふ小米六有理と応て其偏祖を推脱せ腰小吊
たる薬籠より彼仙丹を會半して杜四郎の瘡口多く布塗りて鼻紙
を裂て蓋小あ罵狂の葉木の巨椽を見えりもせどうち連立て觀音寺の
宿所いそぐ小先度小懲て捷徑を求め故の驛路小立かへりて直急に走
るのうら杜四郎の鎌瘡に彼仙丹を用ひりより其血立地小止りて敢又疼

痛を覚むその日點燭時候高嶋の宿り小還る及びて瘡口あがりあ
 困て衣の障を知らむ是よりその後一兩日を歴る隨小その金瘡皆愈て
 迹小見えざるありけり然ればあの両少年ハ仙丹神奇の徑験を惜地小
 感トありける間話休題介程小大江社四郎峯張栄六郎ハ当晚夕飯果
 て後主人石見小向ひて今日目撃する郊外の春色風景を云云
 といひせり譚ふ語次小彼拘把村ある棄木の巨楳の狼籍の為体
 を漏ささる告ぐ石見小驚れど開と安らぬるゆり其奴國
 家の法度を知らむ善悪邪正の暗かり取りしも狂女ありとも
 捨置る又何ある歟危を醸せん歟是亦知るべしと夫千文の隄の類
 るも燈の穴より起るとり小火燭滅さざるあつた後の燭をのり見
 先その消息を決定めて又せん樹もありぬべし嗚呼小任ものねと合て夜

話の果ふけりその次の日小石見小ハ心利若黨小意衷を云云と宣示
 一々惜地小拘把村へ遣る小件の若黨黄昏時候小来り來り隨即石
 見小報る小今朝拘把村赴て巨楳が事の顛末を撈り
 小他の彼村ある莊客某甲の妻ありし時酒を貪り賭泉小耽りて
 人小思る毒婦ありし其良人身故りし彼身貪りくる隨小奸
 計を宗とち村人此の失あれ其家小跟入て多々錢を取らせされ敢去り
 生平小酒肆小赴て酔され敢えん然るを其價を還さる日の多る酒社
 氏等ハ因果で活らんと怒狂ふて斜を擲ち吸口をうち拂ふ狼籍涯りある
 ののうら然りも女流のつられば敵小做さんかを打懲ることを要せむ
 坊賈の悲一さハ只徑紀の妨小做まと思へ賺寛解て反て酒を贈り錢を
 取らせて告訴する者ありとけし巨楳のまをく忌憚らざる美の利を



土石

土

土

土石

のと欲する程小同氣相求むる墨島盆九郎と密通して下り送ふ其惡
 を資ける人の憂ひ小做ると尋り有斯く程小盆九郎の積惡竟小
 發覺れて大江王小搦捕と既小死刑小行りて一か巨謀の愛惜のや
 方々やありけんち歎じてありける比人の為小哄誘されて巧智計をや
 馮られけん大江王を仇と一罵りていふ怨復さんと物狂りく做る目
 あり小昨日何人の所為ありけん長嘸の横小路ゆて巨謀を結ねて
 老樹の幹へ繫りく括り置れ一折相識一箇の里人のありともあり過る
 あり巨謀へ是を喚留めて只管極ひを求め一か其入佛心をりて敢示疑つて
 彼身を結ね一藤蔓も長も拭も解捨てぬと云ふ二町小過だに巨謀の吉心
 ありけん其頭小ありける鎌撥合りて追獲り其里人の肩尖より背
 まで斬りぬんと研介せ窮所の深傷小一霎時小堪ん開か儘控平

張ける巨謀へ是を悔もせむ血小塗れ鎌ち振て狂ひ罵りぬ程小
 途小逢ける里人の老幼男女甲乙とあり身を傷らる者尋りけむ血氣
 壯る村人毎素破事ありと起り立て杖桿捧引提々々走り集る者數
 十名巨謀を中の捉稠て八方より撲り程小羅刹を欺く狂婦あれども
 けふと支ぬ腕を折りと頭碎けて腦髓出て死でける既小して事
 小治るべしあざざれば村長故老驚いて事の邪正を問訂し地方の
 莊官某甲小訴て実檢使を請ふといふ人東西小走り違ひて罵り噪だ
 いと言詳小演一か石見小又驚いて先若黨を勞ひの開か隨小退せ
 然而杜四郎と米六小巨謀か横死の為体を咬つ隨小宣示せ兩少
 年考へ眉を顰めて嘆息の外ありける姑且して杜四郎のいふや
 巨謀の如に賊婦あれども我其職小あざざれば搦捕ることを要せむ

只懲さまり、思ひし虎狼野心の癖あれは怨むに里の男女も多
く、疾を負せ、欽天罰竟免れ、社客們の毆殺され、寔は自
業自得の事。この石見は、うちて然れば、そのゆゑ、和君も巨
謀を懲さんとして、彼身を結紐ひ、を村人等、知らざるといふ事、事の識
断果をまき、他都へ立去らば、後其を知る人ありて、云々評する
折逃らうと、あつらへん、不本意のあはれ、ゆるも、皆時り
おの美を思ひ、おのまや、とのふ杜四郎、然と答て、夏の障をうらむる
嗟嘆、小長、春の目を消し、難ありける、わごふ三月も、既小盡る時、候
巨謀の一件果、うらむ風聲、仄ふ、登時、高嶋、石見、杜四
郎と、采六、告す、彼巨謀の横死の夏、就に、拘杞村人の稟を下り、
其證據あるを、巨謀を毆殺する、社役等、疎忽の失を、宥められて、皆

赦小遇ぬ、おのまや、其故、彼巨謀、小身を傷られたる、村の男女、幸小
て、死に至らば、皆その金瘡、愈されども、おのめ、彼横小路、背を斫らば、
莊客某甲、即死、されば、救ふべし、有斯れば、巨謀、里人の、諸小
死、在とも、其罪、解、屍人を免るべし、況、他が、年来の、毒、惡、是、時、小
遠く、おのまや、その、照驗、分明、されば、則、守の、沙汰、として、形、の、如く、小、行、り、と
ゆ、然れば、拘杞村人の、毒、を、穢、ひ、心地、を、と、置、酒、して、祝、ふ、少
と、講、を、結、び、錢、を、集、めて、被、毆、骸、を、葬、り、の、為、小、五、輪、石、塔、を、建、立
して、追、薦、の、讀、經、町、守、の、の、せ、ん、と、商、量、最、中、と、の、の、美、お、の、人、の、應
小、彼、首、尾、わ、くの、如く、されば、和、君、達、小、障、り、あり、今日、より、一、那
里、ま、れ、發、足、の、隨、意、されども、已、猶、思、ふ、あり、大江、主、の、七、七、歳、峰、張

生十九るゝとや。介を猶總角の儘めて萬里の逆路に赴たぬ胸
 安らざる所あり。故何とあふ人少年と見る時の思ひ悔るも是あ
 べ。或ハ龍陽鶏姦の惑ひを做せ小人の是よりとせうとせは是あり
 て此を思へば早く額髪を剃除して男に成るふあてとあ。倘我意
 見ふ從ひのつ。明日ハ黃道吉日ハ好純不肖ゆして其人あらねむ。故
 の峯張先生の弟子あれば舊好親族の思ひを做せり。幸ふ嫌れど
 ゆうて烏帽子をまゐるせましく欲たあのみ誰何と談されば采六のいも
 さう杜四郎異義もあ。飲びて答るやう教諭誠ふ其理あり。我
 貌を革るふ親も兄も告せしと自恣ある。実ハ非禮の似されども。
 旅ゆいあれバ許されやせん最辱くいと謝されバ亦采六も俱飲びの
 ころを演て猶も餘談ふ及びか。石見女ハ兩少年の温潤ゆて伶俐

さの。今ハとらぬあつて。いハ甲斐ありと思ふを先その準備をい
 そだする。次の日大江峯張の初誓の祝壽あり。石見女是をのりて。理
 髪烏帽子親を兼帯せよ。日杜四郎と采六の額髪を剃除く。石見女ハ
 僅ハ剃刀を當すのそと。その技ハつらなる。老僕若黨立代りて剃も
 ち。結髪果て鏡を與へて見せると。石見女長江まをて前小居り。後立
 て。その似つゝを好とあり。是よりと杜四郎采六も俱ハ其小名の四郎
 采六をもて自稱せよ。各その実名の成勝通能との唱へけ。斯而あ的主
 僕ハ俱ハ衣裳を整へて當城内小遷り。祀られぬ。多賀の神社へ詣んとて。
 高嶋の若黨を案内小あつ。立定て拜と果てかり来ぬれば。壽酒饗饌の
 備あり。その美石見女ハ心を用ひて。為ハ祝壽を做せ。然れば。その賀席ハ
 敢他人を交へ。成勝通能を上坐小推居て。高嶋夫婦相伴より。その餘

一家見ある。老僕若黨奴婢をまて小物喫せ酒飲せ終日飲ひを盡し
 けり。石見の師恩を思ふ誠意の篤く十三屋九郎小劣るべし白あ
 されば成勝と通能へ千謝萬謝も猶足らざと感悦涯りたものう。斯
 而在るべしふあされば明日の這地を立去んえ主人夫婦小別れを告るふ
 石見及諾て和君達去歳よりして屢事の障りありて淹留今れ及びか
 心のそだのせらるるあん發足の隨意あるべし。但し這里より若狭より
 越路るべし赴く小二路あり故官道の要害の為前後の新関を置られて當
 家の士卒小あさより敢往還を許されざの便路を除くの外陸の幾々
 なる山路も沙磧最多かれ士人綽號して碌々越と呼做し其峻阻艱
 難を嫌ふ者へ琵琶湖の畔小立して水路をゆくも考るべし。そと便宜小似
 よれども動もされば風候七日を累るもたかあね近たも及て遠たごとし。

這二路を擇むと成勝早の尋思小及び通能と商量する小。愁ふ
 水路を欲して湖水の畔小赴ふ親かりける。衆少年の水送の為ふとて
 出来ぬるもありぬべし。然らば路次の煩々碌々越をゆくべし。その意を以
 答へか石見及點頭て介らば御導の為小若黨奴隸をまあをへし。
 このを成勝あへたの心か其美小及ん我々の旅より旅小光陰を送
 る者もふ非如一驛半日ありとも。伴當も小用なりと推辭し通能も復
 小のやう。寧明日の起行ハ人小知らざるま欲を伴當もたあとするれと
 小の石見及の強難て竟小其意小任せの菅笠も拭鼻紙もんと草鞋
 小至るまで主僕の為小心を屬て只管餘波を惜むもの。その時成勝通能
 小逗留の程新製の衣裳の逆旅小要ありとて去歳より老実小の志
 する。老僕若黨小皆取らせり。雨衣をのこ携ゆめり。その宵小高嶋の妻

長江を良人と俱ふ團坐入りて云々と話慰る小周防ありける獨子の
 硯吉郎のるをも思ひ出のほろ堪もや涙をうち唾けり現子を思ふ
 親おろ誰もかくとそあへばとこの程ど然し身もぞ知る成勝と通能
 の慰難て惘然する折々四月の初旬に短夜あるに辭退して俱ふ枕ふ
 就たしより幾程もあく呼覚さる主僕早飯を果し割籠を腰りて
 俱ふ身輕小打扮り主人夫婦小告別て鳥の茂林を離る時候遠く
 く立ちれば石見の長江にさく奴婢等も都て別を惜と門傍小立て目
 送りけり當下石見の好純の妻の長江を見えりて我今番もそやうな
 師恩の報いほさか如し世人の親する者大江峰張主僕の如に兒子あ
 らば何を喜愛ひん実小彼家の麒麟児も或羨然しと連り小嘆賞
 までりける介程小大江哲郎成勝峰張栄六郎通能の觀音寺の二の城門を

障りもあつて出離れてゆへこのまじ十町小足らむとある見久まじ
 幾の程小飲眼にて来ふけん高嶋の若黨奴隷が後方小立て礼を傲を思
 ひつけるにるあれ成勝と通能の訝りさるる歩を駐て先其故を諮る小
 件の若黨答ていさや御御導のりりも固く辭つをさひいさる主人の
 とく小安心せむ山を踰果のふまじ俱しまると吩咐られてまゐりいあり
 と告るを成勝通能うち告て現彼人の信義小篤るかま心を用ひられ小
 遣り返さん無礼あるべしと思へ俱小芳をて開が隨小將てゆく程小その
 路一里許ふして早く山脚小来ふけり其頭小茶店ありけれ權且
 茲小憩んとて成勝通能伴當も登見小尻をうち掛て共小山茶を喫程小
 通能の茶博士小うち向ひて碌々越の路程嶮阻遠近を問ひける茶博士
 答て然し素小の山路の官道あるぬと曩小守の御制度とて故道を空

かれより若狭越前までゆく旅客のをきく過るひふありぬた又這山
を七鹿山と喚做しするも碌々越とのりて皆國人の訛りと素木の山名
あり故無名山とのひけるを七鹿山と書改め又その山路六六三十六町の峻岨
あれ六六越と名づけしを碌々越の作るゆやあらん皆是儒士の傳會
らんと物識人の咳くもひた又その山の半腹より美濃路へ出る捷徑ありそ
ら只樵夫の通ふのそ旅客のゆきと云正首小説示を成勝も側はて
然らば去向の心易う峻岨の三十六町の御導の實の要を謝して他を
返さんそ通能と共侶高嶋の若黨奴隷を丁寧小勞へ返さん欲
小這高嶋の若黨の津字六と喚做して性老実る者あれば敢其美小
従つて奴隷の名を可平といふも愚直入るをもていふて還るべし遠く
発を外して跪たつ俱のひさう豫知らせぬ如く主人石見の賞罰正

くは縦令辭せぬも閑かて茲よりかへる罪免るべしといふ
御數々いともいへ今宵の御宿は御伴をよそ願はくは
詩久を言果へうもあざれば成勝も通能も困はて又いふもあ
然らばその意は任せんそ茶博士の茶代を還して山路の為ぬ茲は賣
竹杖四竿買合のり各是を衝立て碌々越を臨てゆく程もそり其路峻
くは俗云爪頭跡ゆて聊も艱苦を覚て向上は青壁巉峨として緑
樹森然夏尚寒く直下せ碧潭皆渺とて青苔寒々水又遠り或は
岳躑躅の韓絳ある分けゆく人を添做して朱ふ交り辰砂小臥をも
かへと思ふ最興あり或は波流花の真白ある時ありぬ雪のまじ消はる
燈不代夜学小耽りしむを忍ぶ心切春の青山何時紫けり今日初聲
の杜鵑四月の天の薄曇の四八とも珍しは目と耳と眼も飽ぬ眺望の

三石齋言者一
十六



あつか



七鹿山の巔
み成勝通能
矢傷野猪小
逢ふ

あつか

一霎時の程に既小巖小落して宛屏風を建てる如く路狭くして沙塵多かり。
 実小碌々越の名空一りごと一步毎小小心せられ礫轉小載られて忽地千
 仞の谷小隊ん成勝と通能へ送小氣を励く杖をちり小辛くして登る者
 十九町やや巖小至りて最平垣光路廣く左右小生茂りて夏樹拉の
 間小土地の小社ありけり旅客の茲小と幣購ゆる為るべし彼字六と
 可平の嶮岨小や疲れ小けん後れていざ来りしが這方の主僕ハを俟んを
 小社の下檀小尻を掛て俱小憩を在り程小前向小高に夏草を踏披に
 けり突然と走り来りて両箇の暴野豬俱小矢傷を負ふる欬威勢猛く成
 勝等を蒐んと找れ成勝通能吐嗟と左右へ避別とく寄ら刺ん
 と疾視より。あの段尚文又けと下回小解分るを聴祿か。

村田

新局玉石童子訓卷之十六終

錢式式式

風式式

